

2019年10月27日

福音書からのメッセージ

自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。

(ルカによる福音書 18章9節)

ファリサイ派の人と徴税人。二人の人物が今日のイエス様のたとえに登場します。この二人は、とても対照的な祈りをしました。ファリサイ派の人は神さまに感謝をささげ、徴税人は神さまに、ただ憐れみを求めた。その結果、義とされて家に帰ったのは、徴税人であったというのが、イエス様のたとえの内容でした。

イエス様はこのたとえを誰に対して語られたのでしょうか。それは、自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対してでした。「うぬぼれる」という言い方にはかなり否定的なニュアンスが感じられます。口語訳聖書では、このように訳されていました。「自分を義人だと自任して他人を見下している人たちに対して」。うぬぼれるとは、自任する、つまり自分を頼りにすることです。

自分の正しさを頼りにする、よりどころにする。それがファリサイ派の人たちの生き方でした。律法に決められた、守るべきことをしっかりとおこなう。時にはそれ以上のことまでする。そのことで、自分は神さまの前に正しい者となるはずだ。わたしはこれだけのことをしてきました。わたしはいつもこういうことを守っています。その行為によって、自分を正しさの中に立たせようとしたわけです。

徴税人とファリサイ派の祈りに戻りましょう。二人の祈りには、大きな違いがあります。それはファリサイ派の人が、「わたしは」と自分の正しさを神さまに伝えたのに対し、徴税人はこのように言います。「わたしを」と。



わたしたちが今、ここにいること。そして神さまを賛美し、礼拝していること

とは、自分の力で成しえたことでしょうか。そうではありません。神さまが「わたしを」呼んでくださったから、「わたしを」憐れんでくださったから、「わたしを」一方的に愛して下さったから、わたしたちは生かされているのです。

でもそれが、「わたしは」となったときに、神さまとの関係は「自分で得たもの」となってしまう。自分がこれだけのことをしたから、正しい者となれた。そうではないとイエス様は言われているのです。

わたしたちの祈りには、「わたしは」という思いが入っていないでしょうか。わたしたちもいつの間にか、ファリサイ派のように自分の行いによって、自分を正しい者と自任してはいないでしょうか。

徴税人は神殿に上ったものの、遠くに立っていました。目を天に上げようともしませんでした。彼にはきっと、周りの人など見えなかった。ファリサイ派が「この徴税人のような者でもないことを感謝します」と祈ったのとは対照的に、自分の内面だけを顧みて、ただただ憐れみを求めたわけです。

神さまはその祈りをよしとされるのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>